

あ ん ま り 似 て な い な

父が子供好きを公言してたので近所の赤児持ちの母親達がほとんど勝手に私の家に。自分が出かけたい時は赤んぼ置いてゆくようになった。父と母は働いてるので一番早く学校から帰って家にいる17才の私に赤児を押しつけてゆくのだ。隣りに住む医者やすこの娘の安子ちゃんの子守りが一番手こずってとにかく抱いたりおんぶして歩き回らないと泣きわめく。ベッドには置けないのだ。大変ばかりではたまらないのである時楽しみを覚えた。安子ちゃんに甘いペロペロキャンデーなめさせたあとレモンをなめさせる。すると今まで笑っていた顔がすっぱーい!!という顔をする。又キャンデーなめさせるとものすごく可愛い顔で笑う。その笑顔とすっぱーい顔の対比が見たくって何度もくり返した。今から思えばひどい事をしたもんだ。後悔しきり。2年ほどたって私の家も安子ちゃん一家も別々の土地へ引っこした。62才の時私は背中と腹の度々の激痛に見舞われた。胆のう炎という診断で薬で胆石取れないかと薬ばかり飲んで逃げ回っていたがとうとう命の危機レベルに悪化して手術をするはめになった。担当は病を初めから診てくれていた女医で手術室に入ると「がんばりましょうね」と言ってくれた。10秒くらいで麻酔が効いて眠りに落ちると5分くらいで、女医の声で「大丈夫ですか起きて下さい」と体をゆすられて起きた。自分では5分眠ったと思っていたのだが2時間30分ほどたっており手術は終わって私の胆のうはなくなっていた。女医に「お世話になりました」というと女医は「私も赤ちゃんの時はお世話になりました。となりのお兄ちゃん。安子です」とニッコリ笑った。46年の歳月飛びこえて一気に思い出した。女医さんの名前初診から聞いていたはずなのに病気のことまで精一杯で思い浮かばなかったのだ。「赤ちゃんの頃の笑顔とあんまり似てないな」と言うと「あたり前です」と言われた。おかしくて大笑いしたら傷口がかなり痛かった。あれから一年安子ちゃんのメスで私は元気だ。

